「イエスの最後の教え」（ルカによる福音書二二章二四～三八節）

1　最後の教え

最近の報道によると、欧米の今年のカーニバルは、軒並み中止を余儀なくされたようです。

カーニバルは日本語では謝肉祭と呼んでいますが、ヨーロッパのカトリックの地域での催しです。受難節に入る前、三日から一週間ぐらい、歓楽が許され、仮面劇や道化、仮装行列など、街中に人々が繰り出し、大騒ぎします。あと少しすれば肉食を慎まなければならない、いわば精進料理だけの毎日になる、その前に、たらふく肉を食べ飲んでおこうというのでしょうか。

しかしそれも今年はないまま、先週の水曜日から受難節に入っています。この季節、私どもは、聖書によって、イエスの十字架への道行きを思い起こしながら過ごす時となることを願っています。

先週は最後の晩餐の記事を読みました。最後の晩餐は、イエスが弟子たちと共に守った過越の食事でした。その席でイエスは自らを過越の羊として示したのです。そしてご自分の十字架の死による贖いを、これからは、パンと杯とに共にあずかることによって思い起こすように、主の晩餐（聖餐）を定めたのです。

最後の晩餐が終わって、イエスと弟子たちはオリーブ山に、ゲッセマネの園に向かいます。この道行きについては福音書は一致しています。ただその間のイエスと弟子たちとのやりとりについて、これもすべての福音書が伝えているのですが、分量・中身ともヨハネが圧倒的に充実しています。マタイとマルコはペトロの裏切り予告を中心に書いているだけです。ルカはそれ以外のイエスの言葉も伝えています。それが今日の私どもの聖書箇所、イエスの最後の教えです。

そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった（二三～二四節）。

裏切る者がこの中にいるとイエスが言ったことに驚き、それはだれのことかと、口々に弟子たちは語り始めます。しかしそれが終わるか終わらないうちに、「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか」という議論が起こったとあります。

この二つの議論、つながっているような、つながっていないような、よく分からないところがあります。ただどうしてそんな議論になっていったか、最後の晩餐の席順と無関係ではなかったのです。前回少し申し上げたように、馬蹄形になったテーブルの円いところに主人が座り、主人に近いところから順番に座る。ギリシャ人、ローマ人の感覚ではそこに上席と末席があるのです。その影響を弟子たちも受けていて席順のことからこうした議論に発展していったと考えられます。

それと共に思い起こすのは、イエスが律法学者を、「会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む」として非難している言葉が、つい昨日までの神殿の境内での教え

にもあったことです（二〇・四五）。いちばん偉いのはだれか、私のほうが上、勝っていると思うのは、ギリシャ人とかローマ人とかユダヤ人とか、民族とか人種に関わらない、人間の性（さが）のようなもの、人の罪です。しかしそれこそ、イエスに従う者としてふさわしくないことでした。

2　自分の命を与える

イエスはこう語っています。

異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者（恩人）と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかしわたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である（二五～二七節）。

最後の晩餐もふくめて、それにつづくイエスの言葉は、大きくとらえれば、別れの挨拶といってもよいものです。そうであれば、このときイエスの視野を大きく占めていたのは、自らが地上を去ったあとのこと、使徒たちがどのようにその働きを継いでいくのか、どのように神の国の福音を宣べ伝えていくのかということであったと考えて間違いありません。

そのさいもっとも重要なことは、イエスを彼らがどのように受けとめているかということでなければなりません。それは、弟子たちが、つねに自分に問うていかなければならないことでもあるのです。

すでにイエスは最後の晩餐の席で、ご自分を過越の羊として明らかにしました。すでに申し上げた通りです。同じ意味で、いまお読みした箇所でイエスは自分を「仕える者」「給仕する者」と規定しています。マルコによる福音書の次のようなイエスの言葉を私どもは思い起こすべきです。

人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである（一〇・四五、口語訳）。

イエスの口から、仕える、という言葉が語られるとき、それはいつも、このマルコが伝えるように、多くの人のあがないとして、救いとして、自分の命を与えることが考えられているのです。

そのような方としてこのイエスを弟子たちは宣べ伝えていく。たんに宣べ伝えるだけではありません。もう一つ重要なことは、イエスの生きたように弟子たちが生きることです。そのようにして救い主イエスを証しする、それが使徒たちの歩みです。いずれにしても、だれがいちばん偉いかというような議論はイエスの弟子にふさわしくないのです。「上に立つ人」という言葉がありましたが、別の訳で「指導する人」（口語訳）です。イエスが地上を去ったあと、ここにいる、一二人ないし一一人の弟子た

ちが、イエスの働きを引き継ぎ、教会の指導者としてふさわしく歩むことが期待されていたということです。

別れの言葉は、ここでとくにペトロを名指ししても語られます。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟を力づけてやりなさい」。するとシモンは、「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。イエスは言われた。「ペトロ、言っておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うであろう」（三一～三四節）。

シモンは、いうまでもなくペトロの本名です。ご一緒になら牢に入っても死んでもよいと言った彼が、この数時間後に、イエスを知らないと三度も言ったしまったことを私どもは知っています。

そうなることをイエスはここで予告している、ここはそういう場面です。すべての福音書が伝えていて、まさに本当だったのだと思います。ただルカによるイエスの予告の言葉は、他の福音書にくらべて、イエスの憐れみが強く出ているように思われます。そう考える第一の理由は、むろん神の許しのもとですが、ペトロのそうした試練はサタンから来たと書いてあるからです。もう一つは、「立ち直る」ことが前提となり、むしろ「兄弟を力づける」という、つまりイエスが地上を去ってからのペトロの使徒としての、指導者としての務めが示されているからです。ペトロのイエスの否認は、すでに克服されたものとして語られています。

3　何も不足はしなかった

イエスの最後の教え、申しましたように、福音書ではヨハネがもっとも詳しく、何章にもわたって、別れの説教と祈りを伝えています（一三・三一～一七・二六）。そこでのイエスの最後の言葉はこうでした。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（一六・三三）。すでに世に勝っている、勇気を出せ、このメッセージは、しかしこのルカでも変わらない。そのことを最後に申し上げたいと思います。

今日の箇所、三五節以下には、少し分かりにくいところがあります。とくに三六節の意味です。

イエスは言われた。しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のないものは、服を売ってそれを買いなさい」（三六節）。

剣を買え、服を売っても用意せよ、というのはどういうことなのか、一つの比喩として（カルヴァン）受け取りたいと思います。イエスが去ったあと弟子たちの遭遇する状況が、いわば「戦場」としてとらえられているのです。すべては平時とは違いま

す。急を要します。「財布」も「袋」も、もしいまもっているのなら、そのままもって行け。中でも重要なのは「剣」です。なかったなら、服を売ってでも用意しなければならない。イエスは、ここで、いわは総司令官として命令を下しているのです。

それほどまでに、イエスの去ったあと、イエスがまさに犯罪人として十字架につけられるがゆえに、その犯罪人の仲間、弟子たちを巡る状況はきびしいものになることが予想されます。

むろん「戦場」といっても、それは信仰の戦いであり、霊の戦いです。しかし弟子たちは、イエスの「剣を用意せよ」という言葉を、弟子たちは信仰の戦いとは受けとりませんでした。誤解したのです。困難な状況で、力には力をもって、剣には剣をもって対抗しなければならない、そうしていいのだと考えたのです。その気持ちを表明したのが弟子たちの最後の言葉です。

「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」（三八節）。

イエスは、これに対してこう言われます。

イエスは、「それでよい」と言われた（三八節）。

「それでよい」とは、剣が二振りある、それでいいという意味ではありません。そうではなくて、それはじつは弟子たちの誤解に対する憤りの言葉なのです。もうたくさんだ、ということです。

イエスの本当の思いは、剣を振るった弟子をイエスが止めさせたところに現れていました。次の段落です（五二節）。詳しくはその時取りあげます。

さて問題は信仰の戦い、聖霊における戦いです。その時私どもがつねに思い起こさなければならないのは、次のようなことではないでしょうか。

それから、イエスは使徒たちに言われた。「財布も袋も履物も持たせずにあなたがたを遣わしたとき、何か不足したものがあったか」。彼らが、「いいえ、何もありませんでした」と言うと・・・（三五節）。

なるほど、これから弟子たちは、イエスの十字架の死に遭遇し、さらに使徒としてまことに困難な道を歩まなければなりません。イエスが「戦場」にもそれを例えたように。しかし、予想されるそうした歩みの中で、使徒たちが思い起こさなければならないのは、かつてイエスによって何ももたずに宣教に遣わされたときも、何も不足しなかった、すべてが備えられたという神の恵みの経験です。それゆえイエスは、最初に、そのことを弟子たちに問うたのです。そして弟子たちは「いいえ、何もありませんでした」と告白したのです。

この告白に立って使徒たちは、そして私たちは歩まなければなりません。すでに世に勝っている、イエスと共に勝っている、このことを、ルカが伝えるイエスの最後の教えから今日私どもは聞きたいのです。

（二〇二一・二・二一）